

◎チェルノブイリ救援・中部では、戸別訪問による募金活動は一切しておりません。不審なカンパ要請には充分ご注意下さい。

ポレーシエ

・・・チェルノブイリに思いをよせて

チェルノブイリ救援・中部 事務局から 1992.7.31 No.12

医師研修プロジェクト無事終了



お別れ会でウクライナの歌を披露する医師と通訳の皆さん（1992.7.11）

ウクライナ共和国から3人の若い医師らが、名古屋と広島 of 病院で医療研修を受け無事帰国しました。3人の医師のサーシャ、ヴァロージャ、そしてリューダは、救援・中部のメンバーの家にホームステイしながら病院へ通い、予定の1ヶ月もあつという間に過ぎてしまいました。まだ30才台の彼らは、妻（夫）やまだ幼い子供を故郷のジトミルに残して研修にやって来たのです。彼らはとても積極的でまじめ、そしてとても明るく、研修を担当した日本の医師やホームステイを引き受けたスタッフの家族に新鮮な印象を残して去って行きました。

これまでいわゆる現場で直接医療にあっていた医師が来日し、まとまった1ヶ月の研修を受けたのは、日本でもこれがはじめてとあってよいでしょう。これは研修を引き受けてくださった、名古屋市港区の協立総合病院（西崎恒男院長）と南区の南生協病院、北生協病院などの名古屋の医師の方たちのご尽力によるところが大きくあらためて深く感謝申し上げます。また研修中付き添っていただいた4名の通訳の方たち、広島のジュノーの会の皆様ご協力ありがとうございました。またこのような充実した具体的な形で救援金を使わせていただけたことを皆様に感謝します。そして3名の医師らが、再び祖国でチェルノブイリの被災者の人々を子供たちを助けてくれることを祈りつつ・・・

尚、期間中のスケジュール内容はおよそ下記の通りです。

研修を受けた医師

1. グリシュチェンコ・ウラジーミル・ミハイロヴィッチ（愛称ヴァロージャ）
男性 38才 専門：ガン パラノフカ地区病院勤務
2. チュムト・リュドミラ・オレゴヴナ（愛称リュータ）
女性 31才 専門：小児科および血液学 ジトーミル州立子供病院
3. ヴェロシツキー・アレクサンダー・ニコライヴィチ（愛称サーシャ）
男性 37才 専門：放射線学、ガン ガン診療所勤務

滞在研修期間：6月15日～7月14日

6月17日～7月2日 それぞれ甲状腺ガイダンス、病理細胞診ガイダンス、循環器ガイダンスなど特にガン早期発見、白血病治療技術を重点的に。この間保険医協会、ECC英語弁論大会などに出席、100万円を贈呈された。

7月3日～8日 広島へ 十河病院、原爆障害対策協議会などで研修、漢方医療などについて。

7月9日～14日 ふたたび名古屋で研修 救援・中部との打ち合わせ反省会 名古屋空港よりアエロフロートで帰国。

* 今回の研修の総経費は、約300万余り（救援物資を除く。詳細は次号で掲載）

彼らに持ち帰ってもらったもの

(1) 医療機器（41箱、28Kg）

点滴用輸液セットおよび消耗品
注射針、カテーテルなど 7000本
医療用空気清浄器

(2) 医薬品（42箱、250Kg）

制ガン剤、抗生物質（おもに白血病治療薬）
超音波診断用消耗品
自動血球計数器用消耗品（4000人分）
甲状腺治療用漢方薬

(3) オリンパス双眼顕微鏡 2台 （以上約400万円相当 304Kg）

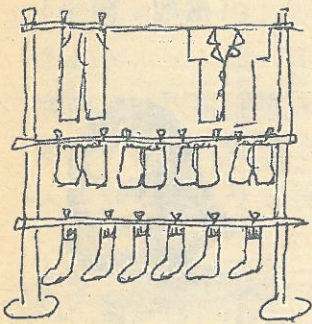
ホームステイの家では・・・

○ヴァロージャさんのパンツ

一体どんな人かしら、彼らが名古屋へ着いたその夜彼ら達3人と救援・中部の方々と夕食を共にすることになりました。約束の時間より早く着いた私は、店の外で皆さんを待っていました。10メートル程向こうに彼達を見だし、”アッ、あの人だ”こちらへどンドン歩いてくる、口の中で”こんにちは私の名前は・・・”あんなこんなと色々な言い方で言う、もう心臓が破裂しそうでそして握手して小さな声で挨拶したっけ、そんなドキドキの出会いから一ヶ月彼達3人は風のようにウクライナへと帰って行ってしまった。本当にあっという間の一ヶ月でした。

ヴァロージャさんと生活を共にして思い返してみると、初めの頃彼はよくパチムー（何故？）、この言葉をよく口にしました。一例をあげると「名古屋はこんなに車が多いのに何故臭くないのか」とか、日本と自国との異なる点がそれ程あったということなのでしょう。

一週間たった頃からお互いに慣れ、少しばかりのロシア語の単語を通して気負わずに話せるようになりました。食事のことも普段慣れたものの中から選んで出し、ヴァロージャさんもなんでも召し上がって下さいましたので困るという事はありませんでした。最後の頃は余裕も出来彼の帰りを待ちながら針仕事もできるようになり、針を持ちながら、「お帰りなさい」なんてまるで息子を待つ母のような光景でした。



左図は、なんだか分かりますか。下着を洗濯に出さない彼への苦肉の策で書いたのがこれなんです。だって「パンツを」なんて照れて私でも言えません。出てきたのはやっぱり上衣とズボンだけでした。主人に聞いたら、「俺だって出す訳ないだろ・・・」というのでそんなもんかなとあきらめました。

大変だったのも本当 楽しかったのも本当 陽気でしっかり者で礼儀正しいヴァロージャさん又会いましょう。今度は私がヴァラノフカへ行くわ、きっと。

（長谷川三知子）

サーシャ・パパ

我家でのホームステイが決まってから、正直言って二つの心配事がありました。一つはステイ中に子供が病気になったりして、迷惑をかけないか。二つ目は、小さな子供（長男九才と長女三才）が居るので、騒がしくて勉強にさしかえはしないか、という事です。しかしそれらの事がとり越し苦労であった上、実は彼にも二才になる娘さんがいらっしゃるので、特に三才の瑠衣をとともかわいがって下さったことは、本当に嬉しいことでした。



二人の子供は一日目から彼に慣れ、二日目には一緒に寝ると言い出す始末。日中彼がいないと「サーシャどこ？」のくり返し。いつしか我家には「サーシャ・パパ」と「お父さん・パパ」の、二人のパパができ上がっていました。

当初数日間の、みなみ病院までの送迎はいい思い出です。歩く時、混雑した電車の中、常に彼に抱かれていた瑠衣は、まるで彼の娘そのもの。（となると、私は奥さん?!） 那样的えば、彼はよく若い女性に振り返って見られていたっけ！ 長身で素敵な彼は、名古屋でも目立つ存在だったのです。

さて、彼の日常はとても忙しいものでした。帰宅は十時半。十一時半の時もあり、無事帰宅するまでは心配でしたし、ハードなスケジュールからいつかダウンするのでは、と心配の毎日でした。また帰宅が遅いため、食事を一緒にする機会も少なく、それが私たちにとっては一番残念なことでした。

「サーシャだがや！」を覚え、「オーシャンで泳げたことが信じられない。本当にありがとう。」と言ったサーシャ。いつかジトミルで、みんなでお会いできる日を信じています。ありがとう。そしてお疲れさまでした。

（横地 隆子）

とんでもねえ出来事

7月14日朝、「お願いするのを忘れるところだった」と私。ジトミルを訪れた時の写真を、ガン病院のドクターに渡してもらうようリュウダさんに最後のお願いをした時の事。次の私の言葉は「えっー!!」その写真の主が、サーシャさんのお父様だったのです。約3週間の我家にとって楽しくも不慣れな最後の日のとんでもねえ出来事でした。



朝から晩までの少々ハードな病院研修、夕方病院へ迎えに行くたびに「疲れていない？」と聞くと、逆に“あなたは？”と聞かれてしまいます。早くお風呂に入って眠ること、と言っても、“皆さんお先にどうぞ”と返されてしまう毎日でした。

来日後、一週間程のある日“今日はね”とうれしそうに、でもちょっと寂しそうに話してくれたのは、息子さんのフォードル君が初めて歩いたことでした。7月1日で1才になるフォードル君のはじめての一步が見られなくてとちょっと涙のリュウダさん。つらい医師としてはともかく母としてはつらい決断をして来日されたのだなあと感じました。

“今日はねこれこれ・・・”と新しい治療法の文献、英語になっているものはいいのですが、日本語版の時は“これは何？”と質問のはじまりです。何回かの英訳を終える頃には“この日本文字はこのことね”と言っていたリュウダさん。漢字は大昔の意味不明の象形文字のようだと言っていたのに理解の早いこと。それに比べ情けない我家の面々。リュウダさんがいらっしゃる前からトイレの掲示板に（家族が覚えるように）ロシア語の挨拶が書いてあったにもかかわらず「ハァーイ！」と挨拶するか無言のうなずきですますことすますこと。おまけにリュウダさんが自分で買って来たジュースを食い意地のはった娘たちが飲んでしまうというハプニングも。思い出すだけでも情けない、恥ずかしい。

邪魔をしないようしらんぷりしながらそしていつもいいのかな、いいのかなと心配する不思議な初日ではじまったリュウダさんを交えての生活でした。あつという間だったねえという末娘の言葉にうなずきながら救援・中部の医療プロジェクトの第一歩が彼らによって始まったことを実感しました。（松浦）

国連プロジェクトその後

今年4月19日から5月はじめまで救援・中部の朱宮裕子さんと萩原重夫さん2名がニューヨークとジュネーヴの国連およびいくつかのNGOを訪れ、国連担当官には放射能難民認定を求めるジトミールヴィスニークとの覚え書きを手渡して来たことは前回でもお知らせ通りですが、その後早くも以下のような動きがアメリカで始まり救援・中部でも反応の早さに驚いています。

1. 米市議会支援決議採択

ニューヨークで合流したコセンコさん達が訪問したニューワーク市（ニューヨークの隣の市）の市議会が、チェルノブイリ被災者に対する支援決議を採択し、

国連が放射能難民委員会を作って、医療や移住のために3000万ドルの支援をするように、訴えることにした。

2. 合衆国上院議長に署名運動開始

アメリカ在住ウクライナ人の会が、“放射能難民”救済を、合衆国上院議長に訴える署名運動を開始した。（署名用紙が届いています。）

3. 米NGOから国際会議開催提案

アメリカの草の根グループ「目覚める市民の会」が、“放射能難民”問題に全面的に賛同。独自に国連に働きかけること、この問題で草の根レベルの国際会議を開くのはどうだろうか、と提案。

4. 国連難民高等弁務官事務所から救援・中部へお礼

国連難民高等弁務官 東京事務所からジュネーブとニューヨークの本部から訪問のお礼を言うようにと連絡があったとのこと。また今後資料などを送って欲しいと。

坂東さんからバトンタッチ

救援・中部の代表坂東弘美さんが、代表を降板されました。ご家庭のこと、この活動のしんどさなどを考えますと「本当にごくろうさまでした」の気持ちで救援・中部一同いっぱいです。坂東さん、あらためてお疲れさまでした。

坂東さんに代わってともにウクライナに最初に救援活動に行った渡辺春夫さんが暫時代表を務められますが、救援・中部では事務体制を見直し、代表に負担の少ない活動を築いていきたいと考えています。このため救援・中部の会議を8月にあらためて開催し、より動きやすい組織のあり方について考えなおすことにしました。



坂東弘美さん

事務局開設と維持会員入会のお願い

チェルノブイリ救援・中部では、救援活動の拡大により事務作業量が膨大となったこと、これまで以上にきめ細い救援をと事務局を開設しました。家賃は月25000円と大変安いのですが長期的に維持するにはまだまだ維持費が足りません。どうぞ維持会員に入会してください。

○維持会員入会費 1,000円/月

(一年分まとめた場合 10,000円/年)

郵便振替口座：名古屋8-108610

(*通信欄に必ず維持会員申込みと記入して下さい)

尚、事務局の住所は、

〒466 名古屋市昭和区楽園町137 楽園アパート1-10

TEL: 052-836-1073

(市営地下鉄鶴舞線川名駅より徒歩15分

// 中駅より徒歩12分)

声・声・声 文通訪問記

東京にお住まいの徳重奈津子さん(20才)が、救援・中部の仲介ではじめて文通がきっかけで、今年3月に実際に現地の文通相手のご家庭を訪ねられました。その旅行記の一部を大変簡単ですがご紹介させていただきます。相手の方は、ナロジチの小さな村に住む女性マリヤ=イワノーブナさんです。

(現地到着後)車でいろいろな所へ連れてってもらいましたが、突然マリヤさんが、「あそこからは、立ち入り禁止なの」と言いました。つまり、事故現場からとっても近い所だったからです。実際、マリヤさんの村には、体をわずらっている方がたくさんいます。マリヤさんの子供たちは、気管支や耳・目を悪くしており、上の子供のセルゲイくんは、1ヶ月間キューバの方へ診断のため行っていたそうです。それに女性の方でも子供の産めない体になってしまったりで非常に悲しい状態でした。

マリヤさんの村は、取材の方を除いて、私が初めての外国人ということもあって、新聞社の方が取材にきたり、学校の校長先生とお会いしたり、その他、多くの方が私に会いに来てくださいました。彼らはとても明るく、日本に対して非常

に友好的で日本人と文通をしたいと頼まれました。私が学校を訪問した時も校長先生から3冊本をいただいて、ウクライナの国のことをよく知ってもらいたいとおっしゃいました。・・・

国内ニュースから あなたはこのことを知っていますか？

(以下記事抜粋)

～生活にしのびよる放射能～

○キャンプ用ランプ替え芯は、「放射能」

(R-DAN通信5/10号より)

(事務局注：今大変なキャンプブームですが、アウトドア専門誌「BE-PAL」3月号で、イギリスEPI社とコールマン社製のランタンマントル(ランプ替え芯)から放射線を出している酸化トリウムが検出された。これに対し科学技術庁が紙一枚で跳ね返るアルファ線しか出していないので大丈夫という回答があったという記事が掲載されました。ところが・・・)

簡易放射線検知器で計ったところ通常の5倍の強いガンマ線が出ていることがわかりました。またその後さらに匿名で、『「アルファ被曝が紙一重で止まるから安全」という通産省の理屈は子供騙しのマッカなウソでマントルを燃やしたガスを肺に吸い込んだ場合RBE20(ガンマ線の20倍の危険度)の体内被曝で肺癌を誘発することが明かです。』という情報が寄せられました。

○病院でのずさんな放射性廃棄物放置

大学病院での職員駐車場に近い職員出入口のまん前にあるゴミ置き場で、持っていた「たんぼぼ(放射線検知器)」のカウント数が急に高くなってびっくり。・・・「たんぼぼ」を持ってしゃがむと、1608、2914とどんどんカウント数が上昇、3000を越えるのがわかって、恐ろしくなって逃げてきました。

この通用口を入れて数m(10m位?)で郵便局、クリーニング屋さん、お店などのコーナーがあり、これは職員、学生、入院している人たちが利用しています。・・・外の駐車場では、カウント数は70台でした。

(事務局注：金沢でも同様の報告がされておりNHKなどで報道されています。)

現地から届いたFAXより

次頁に掲載するのは、ウクライナ共和国チェルノブイリ原発事故後遺症対策住民保護局およびウクライナ最高会議常設委員会の情報です。(大量のため抜粋)

ウクライナ共和国内の汚染地域

～すすむ海への汚染～

- セシウム137：一平方キロメートル当たり1キュリー以上の土地は500万ヘクタールあり、11の州の74行政区（郡）に及ぶ。
- 汚染地域にある4514の市、町、村には14才までの149万2千人を含む611万5千人が住んでいる。
- プリピャチ川とドニエプル川の流域6万平方キロメートルは1平方キロ当たり1キュリー以上の汚染がある。この二つの川はウクライナの3,200万人に水を供給している。放射能はドニエプル川、黒海そして最終的には地中海を汚染する危険性がある。（事務局注：この点については、すでに黒海のセシウム汚染値が上昇していることが一昨年報告されています。）

チェルノブイリの災害で影響を受けた人の病気の発生率

～子供に異常な加齢～

- (A) 4人に一人が免疫力の低下
- (B) 血液の病気または造血器官の病気が2.5～5倍に増加。
- (C) 内分泌系、特に甲状腺の病気が2～6倍に増加。
- (D) 生殖器官の異常または病気が3～5倍に増加。
- (E) ガン、腫瘍が2～3倍に増加（除染作業者の統計から）
- (F) 流産、早産、出産異常、子供の成育や発達障害が1.7～3倍に増加。
- (G) 遺伝的異常が6～15倍に増加。
- (H) 汚染地域の子供の異常な加齢（premature aging）

汚染地域からの住民の移住

～すでに163,000人が移住～

- 1986年：76市町村の91,000人全部が移住
- 1987年～1991年：ウクライナ国家特別計画に従い13,000人が移住
- 1986年～1991年：59,000人が自発的に移住。

以上1986年～1991年の全移住者数：163,000人 さらに来年にかけて、少なくとも85,000人の移住が命ぜられている。そのうち35,000人はいわゆる”緊急避難地帯”にすんでいる。その放射能汚染レベルはセシウム137が15キュリー/Km²以上である。

今後の取り組み

・郵政省のボランティア預金から1640万円が、救援・中部の救援計画に交付されることになりました。超音波診断装置、放射能測定器、医薬品などを購入して今年中に送る予定です。（事務局注：これらはすべて救援物資の購入領収書と引換にお金がいただけるそうです。つまり後払いなのデス。でもうれしい。）

・ワクチンプロジェクトをまもなく本格的に開始します。医薬品、ワクチンなどの現地の実状を来日した医師から聞き取り調査をしたり現地から資料を取り寄せて調査して来ました。また輸送方法についてもさらに検討中です。このプロジェクトについては次回のポレーシェで詳しくお伝えします。

・今年の秋、第二次医師研修を行います。ECCの全面的な協力で新たに選ばれた医師に大阪で研修を受けてもらいます。

＊ ＊ お知らせとお願い ＊ ＊

- ・ネチポレンコさんたちの来日講演録全文をまとめました。専門家の解説つき。一部350円。
- ・「とどけウクライナへ 私たちの救援日誌」（板東弘美著 八月書館） 定価1648円 書店または救援・中部までご注文ください。
- ・救援物資を保管する倉庫、納戸、土蔵、などなどスペースを貸してください！
- ・救援・中部のスタッフ募集中。資料整理を手伝ってください！
- ・この通信誌「ポレーシェ」の購読を募集中。隔月発刊で年千円です。
- ・被災地の家族や子供たちから届いた沢山の手紙や絵が「絵はがき集」になりました。1セット5枚で300円です。救援・中部まで直接お申込みください。
- ・事務局維持会員になって下さい！詳細は本誌をご覧ください。
- ・現地からチェルノブイリ特集英語版「CHERNOBYL HOSTAGES No.2」新着！500円
- ・チェルノブイリ救援・中部のテレフォンカード完成。一枚1000円50度数。

チェルノブイリ救援・中部（郵便振替口座 名古屋8-108610）

事務局 〒466 名古屋市昭和区楽園町137 楽園アパート1-10

TEL.FAX:052-836-1073（月、水、金曜日10:00-15:00）

その他の問合せ先：岡部（昼のみ）豊橋市東新町334 TEL.0532-52-2380

長谷川（夜のみ）名古屋市名東区赤松台502 TEL.052-773-0271

（問い合わせはなるべく郵便で、できれば切手を張った封筒を同封してください）